

節を改めてまとめてみたい。

### ●第二節 信の確立法

法然の信の確立の仕方については、非常にわかりやすい形で『選擇集』に述べられている。それはまず仏教を志す人を対象にして、選擇によつて行に對する信を確立することから入るのである。そして行を選び取ったのち、三心を具足して往生するのであるが、もちろん行に對する信を確立することもすでに三心の一部である。

聖光は安心疑心・起行疑心を立て、安心疑心は往生できないが起行疑心は往生できると言った。前に述べたように起行疑心においては、すでに本願行に對する深心は確立していることを前提としている。したがつて、法然と同様に選擇をその思想の原点に持っていることがわかる。

それでは隆寛における信とは何であろうか。隆寛自身の信は自力の行を行ってきたことの反省から生まれたことが示唆された。この意味するところは、同じ念仏でも三心不具の往生できない念仏が、本願を正しく知ったことで三心具足の念仏となり、往生の行となった事実であろう。他力に歸し本願に歸し本願行に歸すところに、三心が具足すると言う。

これはおそらく仏教を求め長い間苦しんできた人の論理とも言える。そこで隆寛は回入と

という言葉で今まで修してきた行を正統化するのである。選擇とは仏教を志したときから始まる。しかし、回入とはすでに諸行を行じていることが前提となる言葉であり、他力に帰す前にすでに仏教を勉強していることが前提となっているのである。隆寛は法然門下にあつて、他宗からの非難に反論する重要な立場にあり、『選擇集』の意図するところは十分認識していたと思われるが、その思想の中核には他宗からの転向があつたものと推定される。したがつて、信の確立は回入することであつたと言つて差し支えない。これは選擇の深心に対して回向発願心重視の姿勢とも言えるであらう。

証空の場合について考えれば、証空は隆寛と違い、法然門下に入ったのち仏教を勉強したと考えられる。『四十八卷伝』によれば、法然五十八歳のとき、十四歳で入門したことが知られている（『日本仏教思想史研究 浄土教篇』一八頁）。したがつて、証空三十六歳で法然が入寂したことになる。その後天台の師に就いたのち、証空は自説を確立したとされる。そこで展開された安心論は『観経』を最高位の経典とし、そこから得られる領解であつた。領解したのち、あるいは往生を願う心が起こつたあとには、本願である念仏が行として当然のようになされなければならず、その何の色付けもない他力の念仏に三心が自然と具わり往生できるのである。したがつて、安心と起行の関係は、まず何らかの心的作用があつてはじめて行が成り立つとするのである。それは、同じ行でも真実の安心を得たあとには雑行でも正因となるという言葉でもわかる。しかし、証空は本当に領解したならば、念仏以外の行はありえ

ないと考えていたと思われる。また、本当に往生しなかったならば自然と念仏が行として具わるべきものと考えていたとも受け取れる。すなわち領解できたかどうかは、その態度でわかるのである。それでは領解する前の状態から領解するにはどうしたら良いのであろうか。すなわち信をどうやって確立するのか。残念ながらこの点については、明確に述べられていないと言えない。

すでに仏教を志している人については、隆寛と同様に回向発願心が重要な役割を果たし、諸善を回向することで往生できるのである。これから仏教を志す人には、とにかく『観経』を勧めてその本意を領解することが救いであると言っているのであろう。このように考えると、領解すなわち三心を得ることが信を確立したということになる。もしそうであるならば、証空自身がその著作の中で自力他力ということだけでなく『観経』の優位性をもう少しわかりやすく明確に論証すべきであったと思う。

法然は仏教における行を選択した。今、証空は経典を選択し『観経』を選び取ったわけである。証空は『観経』を三心経と捉えていた（石黒観堂「三心論」・『西山学報』十一、昭和十五年）のであるから、信の確立をするということが三心を発すということそのものと考えていたのかもしれない。